

江戸の神社祭礼と芸能

—神田祭の変遷—

岸川 雅範（神田明神権禰宜）

The Shrine Festivals and Entertainment in Edo : The Transition of Kanda Matsuri

Masanori KISHIKAWA (Shinto priest of Kanda Myojin)

Abstract

It is obvious that the festival culture and entertainment in Edo were variously changed over the long history if compared to the festival forms between the Edo period and the present time. In this paper, Kanda Matsuri shall be covered as an example of the festivals in Edo; the festival culture and the history of the entertainment and their current ones shall be clarified while comparing the schedule and route of the festival and the music, seen at the festival.

Keywords: Kanda Matsuri, festival culture, entertainment, Edo period, present time

1. はじめに

現在、神田祭や山王祭など東京で行われる比較的に大きな神社祭礼の多くは、江戸時代にも非常に賑やかに行われた祭礼であった。今でも都内の祭礼で最大級の規模を誇る神田明神の祭礼・神田祭は、現在2年に一度5月中旬の土日を中心約1週間行われる。神輿に神々をお乗せする鳳輦神輿遷座祭や氏子町会神輿神霊入れ、神田日本橋界隈108の町を巡行する神幸祭、約200基の氏子町会神輿が担がれる神輿宮入・神輿渡御など、賑やかな祭礼が行われる。また献茶式や薪能、例大祭といった厳かな神事も行われる。

こうした江戸の華、そして日本三大祭りの一つにも数えられる神田祭は、天平2年（730）に神田明神が創建以来行われてきたが、盛大になるのは徳川家康が江戸幕府を開いて江戸が一大城下町となつてからのことと考えられる。江戸時代の神田祭は、江戸幕府の公式年中行事として行われたため俗に「天下祭」と呼ばれた。当初は毎年9月15日に行われていたが、後に2年に一度に変更され、徳川家の氏神・江戸山王権現の祭礼・山王祭と隔年で行われるようになった。神輿、山車、附祭、御雇祭などからなる祭礼行列は、神田界隈を通り江戸城内に参入し、将軍や御台所、若君が上覧することもあった。江戸時代の神田祭では、多くの江戸の祭の音楽がそれぞれの行列で聞こえてきたと言われている。

本稿では神田祭の、江戸時代と現代との実施状況を比較し、その祭礼と芸能の変遷について検討する。

2. 神田明神の建立の歴史と継承

神田明神（図1）は日本の神を祀る神社である。御祭神は3柱で、大己貴命、おこなむちのみこと少彦名命、すくなひこなみこと平将門命、たいらのまさかどのみこと鎮座

している。大己貴命は通称「だいこく様」と呼ばれ、国土繁栄、縁結びの神、幽冥界主宰神である。少彦名命は通称「えびす様」と呼ばれ商売繁昌の神と病気平癒の神として知られている。歴史上の人物・平将門命は除災厄除の神として崇敬されている。



図1 神田明神（平成30年12月撮影）

神田明神の創建は、先にも触れたが天平2年（730）、奈良時代である。東国・武蔵国の豊島郡芝崎村（現・千代田区大手町にある将門塚周辺）に、真神

田氏の一族が祖神・大己貴命を祀り神田の社としたところから始まる。その後、鎌倉時代になり延慶2年（1309）に平将門公の神霊を合祀、戦国時代になると太田道灌や北条氏綱などの武将により崇敬された。

神田明神に転機が訪れるのは元和2年（1616）、今から400年前のことである。江戸幕府により道灌が建立した江戸城が拡張されることになり、神田明神が拡張の区画にあったため、現在の地である江戸城外の外神田に遷座した。この場合は表鬼門守護の地にあたり、以後「江戸総鎮守」として幕府より社殿や神輿なども寄付され、将軍はじめ江戸の人々にもあつく崇敬されたと伝えられている。

明治時代に神田明神は神田神社と改称し、皇城（現・皇居）鎮護の准勅祭社さらに東京府社に列格し、東京の守護神として信仰されるようになった。

現在は東京都心、元祖下町の神田、老舗ひしめく日本橋、世界的観光地の秋葉原、日本最大のビジネス街である大手町と丸の内、旧神田青果市場、魚市場など、108町の総氏神様としてそれらの町々を守る神として崇敬されている。

3. 神田祭の運営と実行スケジュールについて

(1) 江戸時代の神田祭

江戸時代の神田祭の運営がどのようなものであったかについて、江戸時代に神田明神社家をつとめた木村信嗣により明治33年（1900）に書かれた神田明神に関する由緒書をもとに以下にまとめる。

江戸時代の神田祭は、8月上旬に神社より神社仏閣を管理する寺社奉行へ祭礼を執り行う旨の伺いをたてるところから始まる。10日前後に寺社奉行から神社へ祭礼を執り行うべき旨が伝達され、神田祭を行うことが決定し、その旨が神田明神より町年寄3名へ伝えられる。その後、神田明神では神輿行列に奉仕する大伝馬町・南伝馬町・小舟町名主へ人足手配などの書状、各氏子町へ恒例通り山車を出してほしいこと、武家に神輿警護の人馬・長柄を恒例どおり出してほしいとの書状を送る。また、祭礼費用の奉納を各町名主月行事へ伝達もする。

9月になると神田祭の準備がより慌ただしくなる。まず2日に祭礼行列に出る大櫛の準備、6日に神輿舎より神輿が出され、馬喰町附木店講中の奉仕により飾りが施され社殿内の幣殿へ奉安される。9日、前斎神事として四門に忌竹を建て木綿櫛を付け、庭上に祭鉾や四神鉾などを立てたり、氏子町々で軒提灯が掲げられ

る。11日、神田明神の神霊が神輿へ遷座し、神輿に装飾が施される。同日には、寺社奉行より渡御の道筋書が神田明神側へ渡される。13日、各町・各家・武家屋敷で祭の準備が行われた。

14日の夜、斎夜神事として、束帯姿の神主と狩衣姿の社家が布衣、白丁等の徒者とともに社殿にて祝詞を奏上し神楽を執行する。各氏子町では夜宮と称して、最寄りの町々が連合で山車や附祭を曳き出すなど、前日から賑やかな雰囲気江戸が包まれる。

15日神田祭当日、祭礼行列の巡行が午前2時から午後8時まで行われる。また同日、神田祭に際して神田明神より江戸幕府へ祭礼の玉串（神札）や神供が献上される。浅草日輪寺の住僧の参拝もある（図2）。翌16日、祭礼御礼参りと称して、町々の人々が祭礼行列で着た衣装の姿で附祭などとともに神社に参拝し、それを一目見ようと見物人が群集する。同日、神霊を神輿より神田明神本殿に遷座する。17日、潔斎の状態が解かれ神田祭が終わる。

(2) 現在の神田祭

現代の神田祭は2年に一度5月中旬の土日を中心に1週間行われる。まず4月初旬に、神田明神の神職と氏子総代、そして氏子から選ばれた祭典委員により神田祭祭典委員会が開かれる。さらに4月には氏子総代会、警察消防関係会議、インターネット会議、神田祭グッズ発注など、事務的な会議や打ち合わせも多く行われる。

5月になると、各氏子町会の各所に神輿を奉安するための神酒所・御仮屋が作られていき、町々が神田祭の雰囲気に包まれていく。

神田祭の1週間は以下のように行われる。2019年を例にとると、5月9日（木）夕闇の中で神霊を鳳輦神輿にお乗せする鳳輦神輿遷座祭、10日（金）氏子108町会の持つ町神輿に神霊をお乗せする氏子町会神輿神霊入れが行われる。翌11日（土）8時より神幸祭が行われ、鳳輦と神輿はじめ総勢1000人の祭礼行列が神田、日本橋、大手町・丸の内、秋葉原を巡行する（図3）。12日（日）の神輿宮入では各氏子町会の町神輿約100基が終日神田明神に宮入参拝し、さらに各町内を連合あるいは単独で渡御する賑やかな祭が展開される（図4）。

1日空いて14日（火）以降は表千家家元による献茶式、金剛流による薪能・明神能・幽玄の花、年に一度の例大祭が行われ、神田祭1週間の幕を閉じる。



図3 神幸祭（平成27年5月撮影）



図4 神輿宮入（平成29年5月撮影）

4. 神田祭の行列が練り歩いた場所

(1) 江戸時代の神田祭

神田祭と江戸幕府を築いた徳川家康には関ヶ原の戦いをめぐって以下の由緒が伝えられている。

慶長五年、権現様会津景勝御退治として関東へ御下向遊され、江戸表へ御着之上、会津へ御発向御勝利之御祈禱被仰付、其外上方にて石田以下之逆徒蜂起に付、御退治として野州小山より江戸表へ御帰城被遊候節も、御合戦御勝利之御祈禱精誠執行可仕旨被仰付、依之毎日於神前宗源行法御祈禱執行仕候。不思議成哉、九月十五日神田御社御祭礼日に相当り、御合戦御勝利被遊、天下一統御治、依之御帰城以後格別之御信仰厚候^{註1)}。

慶長5年（1600）、徳川家康は神田明神の神主たちに戦いに臨み戦勝祈禱を命じ、見事9月15日、神田祭の日に勝利した。以後、徳川将軍家は格別に神田明神を信仰し、神田祭は江戸幕府の公式年中行事として行われることとなった。

江戸時代の神田祭は以下のような道筋を巡行した。午前2時、神輿、山車、附祭などが江戸城に向け出発し、山車や附祭など氏子町の行列は湯島聖堂前桜の馬場、神輿や大櫛などは神社より出発し、昌平坂周辺で合流した（図5）。筋違橋を渡り江戸城外曲輪内に入り神田の町々を巡行した後、田安御門より江戸城内曲輪に入り昼食をとった。午後より行列は上覧所前や武家屋敷を通過し、上覧所では将軍や御台所の上覧にあずかることもあった。ちなみに田安御門から幕府が費用を負担した御雇祭行列も合流した。

竹橋御門を通り武家屋敷を巡行して神田明神旧蹟地に到着し、奉幣の儀、さらに獅子頭の狂い舞があった。その後、常磐橋御門より内曲輪を出て、山車や附祭、御雇祭は解散し、神輿行列のみ日本橋へ渡御し、大伝馬町、南伝馬町、小舟町の各所で休憩をとりつつ、午後8時に神社へ帰った。道筋では町々が提灯で神輿をお出迎えし、神田明神へ帰社した。午前2時から午後8時とかなり長時間の巡行であったと言える。

(2) 現代の神田祭

現在の神田祭で鳳輦神輿が巡行するのは神幸祭の時で、神田、日本橋、大手町・丸の内、秋葉原といった氏子108町会を巡行する。

まず午前5時、御鍵渡しの儀という神田明神の神輿庫の鍵を預かる宮鍵講の人々が鳳輦神輿奉安殿の扉を開き、鳳輦神輿を社殿前に奉安する儀式から始まる。午前8時、社殿前で発輦祭が行われ木遣りを先頭に神幸祭行列が108町会に向け出発する。行列は神田日本橋の町々を巡行しつつ、午前10時半、神田明神旧蹟地・将門塚に到着し奉幣の儀を行い、その後、午後1時半、日本橋の両国で昼御饌の神事を行い、昼食をとる。途中日本橋蛸殻町周辺で附け祭の仮装行列も加わり、東京水天宮や日本橋人形町を練り歩く。午後4時半、中央通りに入り三越日本橋本店前、秋葉原電気街を通過し、午後7時に神田明神に帰社し、着輦祭を行い神田祭・神幸祭は幕を閉じる。



図2 歌川芳員『神田祭出しづくし』安政年間（1854-1860）

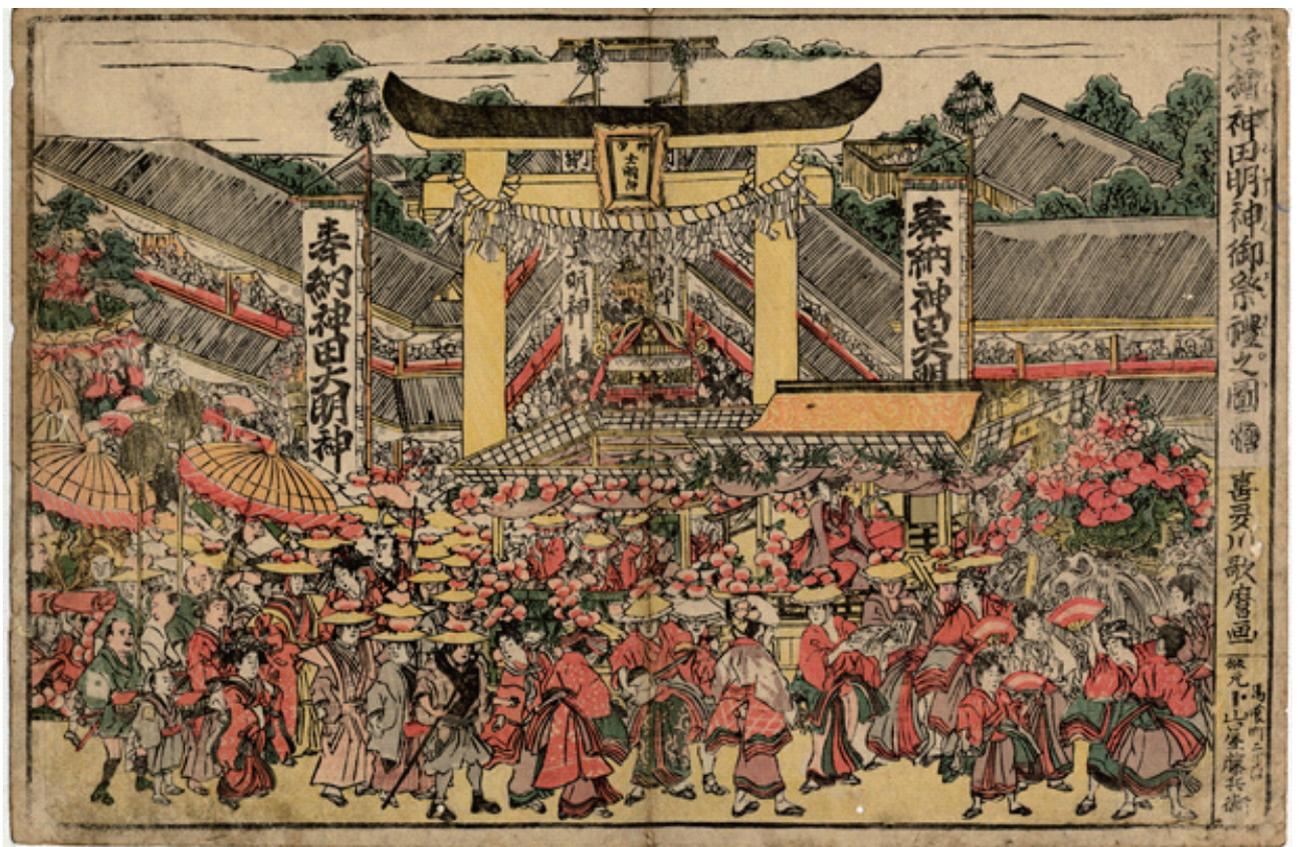


図5 喜多川歌麿2代『浮繪神田明神御祭礼之圖』文化3～13年（1806-1816）



図 6-1 『紙本着色 神田明神祭礼絵巻』(神田神社蔵) 踊台と底抜屋台



図 6-2 『紙本着色 神田明神祭礼絵巻』(神田神社蔵) 地走踊と底抜屋台



図 7 『紙本着色 神田明神祭礼図巻』 雉子町の行列

5. 神田祭の芸能 —音楽と舞踊—

(1) 江戸時代の神田祭における音楽と舞踊

●山車の音楽

江戸時代の神田祭では、山車が神田を中心とする氏子町より36番組45本前後出された。栄誉ある1番、2番の山車は日本橋の古町であった大伝馬町と南伝馬町が国役としてつとめ、3番以降は神田の町々が決まった番組から出していた。

江戸の山車は、各氏子町のシンボリックな人形や飾りを乗せたもので、江戸の最初は小さな人形などを飾った矛を担ぐ形式、その後人形などの拡大化により2輪車で牛が引く形式へと変化していった。形式も様々で吹抜型、笠鉦型、一本柱万度型、岩組型、船型、江戸型（せり出し型）などと呼ばれる型があった。山車の高

さは江戸後期くらいまでは4～5メートル、幕末明治期には8メートルにも達する大きなものが製作された。

それら山車にはおおよそお囃子が乗っていた。その形も、大太鼓を2人で叩く形式や5人囃子が乗り演奏する形式など様々であった。そのルーツは、本所や葛西など江戸近郊の若者たちにより演奏された「バカ拍子」「馬鹿ばやし」などであり、それらは後の葛西囃子と言われている。幕末期に書かれた『紙本着色 神田明神祭礼絵巻』（神田神社蔵）には、山車の上でお囃子とともに、ユニークなお面をつけて踊る踊り手も多く見られる。

●附祭の音楽と舞踊

平成28年に山・鉾・屋台行事のユネスコ文化遺産への登録が決定して山車祭が注目され、江戸時代の神田祭ははじめ江戸の祭礼でも山車が出されていたことに触れられることがよくある。つまり江戸の祭礼も山車祭中心であったということである。しかし、江戸の祭礼の歴史を細目に調べると、山車よりも人気があった行列があった。江戸の祭礼で最も人気があった行列、それは附祭である。

この附祭は最近の祭礼文化研究により明らかになってきた行列である。江戸時代に流行した風俗や芸能——能、浄瑠璃、歌舞伎、舞踊、音曲、草双紙や伝説など——を多様に採り入れ、担ぎ万度、練物、造物、踊台、地走踊、底抜屋台（担ぎ日覆）などが出された。各氏子町が競い合うかのように、毎回違うテーマを考え趣向を凝らして賑やかに出した行列であったため、非常に人気があったと言われている。

附祭の大きな特徴は、その主役の多くが女子であったことである。9～19歳くらいの女子たちが参加し踊りを披露したりした。

女子たちが踊りを披露した行列は、主に踊台と地走踊であった。踊台は踊り子の女子2～3人が芸を演じる舞台で担ぐ物と車で曳くものがあった。『紙本着色 神田明神祭礼絵巻』に描かれた踊台には踊台の中で2人の女子が踊り2人の女子が正座して謡っているように見える。踊台の周りには男子たちが大勢で踊っている姿が描かれている。踊台の後方に底抜屋台があり、その中で囃子方たちが音曲を奏でている。動くライブスペースとでもいうべきであろうか（図6-1）。

一方、地走踊は地踊とも呼ばれ、大勢の仮装した女子たちが踊りながら歩いており、その後ろに男女の囃子方が底抜屋台を中心に大勢で演奏している姿が描かれている。こちらのほうは路上ライブとでもいうべきだろうか（図6-2）。

附祭の踊台や地走踊に参加した女子たちは、神田明神の氏子だけではなく、氏子以外の女子たちも多く参加し、普段お稽古で磨いた舞踊を披露していた。さらに、この附祭では歌舞伎で活躍した芸人がプロデューサーとなり作演出をつとめたり、演奏も囃子方というプロの芸人たちによる演奏で女子たちが踊ったと記録に見られる。素人といっても普段踊りを稽古しプロに近い腕前を持つ女子たちと、歌舞伎音楽に携わったプロの囃子方たちのコラボは、まるで現在のAKB48や乃木坂46を想像させる。神田祭に参加するそうした人々の行列を、一目見ようと見物客が殺到したことは想像に難くない。

●雉子町の山車と附祭

この附祭の具体例として、江戸時代後期の神田明神の氏子町の一つである雉子町の附祭をとり上げる。

雉子町の町名主は斎藤月岑で、神田雉子町に住み同町ははじめ同裏町、三河町四丁目、同裏町、四軒町の五ヶ町の町名主をつとめた人物であった。この月岑は、江戸文化に関する資料を多く編纂して。有名なものをあげると、『江戸名所図会』（天保5、7年（1834、1836）刊）、『東都歳事記』（天保9年（1838）刊）、『武江年表』（嘉永2、3年（1849、1850）刊）、『同』続編（明治15年（1882）刊）、『声曲類纂』（弘化4年（1847）刊）などで、今日江戸文化を知る上で重要な資料の多くを残した人物でもある。

雉子町は神田祭では毎回30番目に山車を出していた。その町名から白雉子の造物を乗せた山車が多かつ

た。また附祭も多く出しており、宝暦年間（1751～1764）の神田祭を描いたとされる『紙本着色 神田明神祭礼図巻』（神田神社蔵）には、桃太郎に関する行列を出している様子が描かれている。桃の木の万度、「桃太郎鬼嶋渡」と書かれた幟、隠れ蓑打出の小槌など宝物と鬼の仮装、輿に乗る犬、猿、桃太郎の仮装など、雉子にちなんだ行列が出された（図7）。その他にも文政12年（1829）の神田祭では能「高砂」をモデルにして作られた長唄・高砂丹前の学びの練物、天保6年（1835）では桃太郎人形を中心とした桃太郎凱旋の学びの練物などを出したことが記録に見られる。

天保12年（1841）の神田祭でも雉子町は附祭を出した。この時附祭を出すためのくじ引きが行われ、雉子町は当たりくじを見事に引きあて当番町となった。『斎藤月岑日記』の天保12年7月9日の日記には以下の記述がある。

九日、(中略)、昼後、祭礼鬨引寄合へ行、山吹なり、雉子町・岩井町・さ久間町当る、
十日、天気よし朝雨、後晴、さとミ太夫来る、居付地主よぶ、祭礼鬨当り之儀披露する^{註2)}、

と、附祭を出すことになったことを居付地主に報告し、清元佐登美太夫に附祭における浄瑠璃語りのプロデュースを依頼した。

さらに7月25日、佐登美太夫に依頼していた浄瑠璃語りなど演目の仕様書を町年寄へ提出したり、8月14日に附祭に出演する芸人の名前書の提出したりしている。同月24日に附祭で出す人形細工の下地の下見、27日に同じく附祭で出す踊台の出来の下見など、月岑の附祭に対する並々なぬ気の入れようがうかがわれる。現代と同じく江戸時代も、大人が子ども以上に祭りに入れ込んでいたことを垣間見られる。

9月15日神田祭当日、雉子町の附祭が32番の山車の後に出された（図8）。演目は三都に関する附祭で、三箇津と書かれた幟と手古舞を先頭に、京の学び地走り踊、巨大な女の造物、囃子方、大坂の学び練物、江戸の学び踊台と囃子方から構成される出し物が出された。京の学びの出し物では所役はおおよそ鉄棒引き、踊り子、浄瑠璃語り、三味線などを10代の女子が担当した。大坂の学びでは10代の踊子と囃子方による三味線、浄瑠璃語りなどが加わった。江戸の学びも大阪の学び同様に数名の踊子と囃子方による構成であった。

江戸時代の神田祭のガイドブックとも言える絵付きの祭番附『神田大明神御祭礼番附』（神田神社蔵）に載せられた浄瑠璃文句を見ると、「五所車引哉袖襦」「舞奏いろの種蒔」「江戸桜衆袖土産」とある。この番附には出演者のメンバー表もあり、踊り子や三味線ひきは10代の女子がつとめ、浄瑠璃語りでは延、常磐津、清元、三味線では延、岸沢、



図8 雉子町が出した附祭
（『天保十二丑九月十五日 神田御祭礼附祭番附』一部）

清元、笛では住田、福原、坂田、鼓では住田、大鼓では坂田、住田、小鼓では坂田、太鼓では田中、坂田、上調子では岸沢などの名前が記載されている（図9）。また、文久元年（1861）の神田祭の附祭に参加した練子芸人たちの名簿『文久元辛酉年 神田明神祭礼練子芸人名前帳』（神田神社蔵）には、浄瑠璃語りに富本豊前太夫、小鼓に望月太喜蔵、笛に住田清七、浄瑠璃語りに清元延寿太夫、三味線引に柗屋正次郎、浄瑠璃語りに常磐津吾妻太夫など多くの芸人の名前が記載されている。

神田祭に多く参加していたこれら歌舞伎音楽で活躍したプロの芸人たちは、当時一流と言われた演者たちが多かったようである。神田祭が江戸幕府の公式年中行事・天下祭であったことを考えれば当然のことと言えるであろう。



図9 『天保十二丑九月十五日 神田御祭礼附祭番附』

(2) 現代の神田祭おける音楽と舞踊

現在の神田祭では木遣り、神田囃子、将門太鼓、雅楽といった音楽や舞踊が演奏され謡われる。

木遣りは元々木を曳く時の掛け声で、その他石曳という石を曳く時の掛け声もあった。この木遣りは戦国時代頃からの築城の中で活躍を見せるようになり、江戸時代も幕末期まで橋の渡り初め、上棟式、祭礼における山車引きなどで木遣が登場した。謡い手は主に土木工事に関わった鳶の頭たちで、現在は江戸消防記念会の人々により継承されている。木遣りの曲には、真鶴、地（六曲）、くさり物、追掛物、手休め物、巻物、流し物、端物、間などがある。現在も神田祭・神幸祭を始め神輿渡御などの祭礼、1月6日の江戸消防出初式、11月3日の明治神宮参拝・木遣奉納などで、高らかな鳶頭たちの木遣りを聞くことができる。

神田囃子は江戸時代の祭囃子で、神田堅大工町の新井喜三郎により誕生したと伝えられたと言われている。現在、神田囃子は同保存会により演奏され、江戸の祭囃子の一つとして、葛西囃子（葛飾区）・葛西囃子（江戸川区）とともに、東京都無形民俗文化財（民俗芸能）に指定されている。葛西囃子は享保の始め頃（1720）、葛西領総鎮守香取明神の神主能勢環が神楽囃子を創出したところから始まったと言われている。また、本所や葛西などの江戸近郊の若者たちによる「バカ拍子」「馬鹿ばやし」の演奏がそのルーツとも言われている。

神田明神将門太鼓は神田明神の御祭神のたいらのまさかどのみこと一柱・平将門命の生き様を太鼓で表現した太鼓である。昭和54年に平将門公の武徳を太鼓で表現した太鼓集団・将門ばやしが結成され、その後、神田明神将門太鼓と改称し、昭和55年4月には稚児太鼓も結成された。現在、神田祭や神田明神の春祭りや将門塚例祭などで奉納演奏が行われている。

現在、毎年行われる例大祭をはじめ祈年祭や新嘗祭、結婚式などの神事で、小野雅楽会や神田明神の神職巫女による雅楽の奉奏と巫女舞が行われている。例大祭では、神田明神独自の明神胡蝶の舞が演奏され、その他、豊栄の舞、悠久の舞、浦安の舞なども各神事の中で神々に奉納演奏されている。豊栄の舞は、作詞・臼田甚五郎、曲・宮内庁楽部初代楽長・東儀季熙で、神々の恵みに感謝し人々の幸せ平和を祈る舞で、結婚式などで多く演奏され舞われる。悠久の舞は、昭和15年の紀元2600年奉祝の際、当時の楽長・多忠朝により作曲された舞楽である。鎌倉時代の僧侶・東巖慧安の「すえの世の末のすえまで我が国はよろずの国にすぐれたる国」に曲をつけたものである。最初は男子4人によって舞われていたが、その後、昭和39年東京オリンピック開催を祝い、女性による舞として行われるようになった。神田明神独自の舞楽・明神胡蝶の舞は、平成2年に天皇陛下御即位奉祝で初披露された舞楽である。明治天皇御製「ふく風も のどかになりて 朝日かげ 神代ながらの 春をしるかな」に曲をつけ、宮内庁・豊英秋氏が創作した舞楽である。

6. おわりに

以上のように、奈良時代に神田明神の建立とともに始まった神田祭は、江戸時代に徳川家康により江戸幕府の公式年中行事として発展し、現代に引き継がれている。明治22年までは9月15日に行われていたが、現在は5月中旬の土曜日を中心に実施されている。江戸時代の祭礼行列には神輿のほか、山車や附祭が出され、山車の上で演奏される祭囃子や附祭の浄瑠璃の演奏と踊りなどの芸能が演奏された。木遣や囃子など歌や踊りなどの芸能は、江戸時代から受け継がれてきたものに加え、各時代に新たに演奏されるようになったものも多い。現在の神田明神においては江戸時代と同じくらい、囃子や太鼓や舞楽など音楽舞踊に囲まれる中で祭礼や神事が行われていると言えよう。今後も現在以上に、日本人の祭礼文化の中で音楽や舞踊が重んじ、伝承、発展していければと考える。

【註】

註1) 月岡主計「神田大明神御由緒書」、寛政5年(1793)、太田南畝「異本 武江披砂」『太田南畝全集』第十七卷、岩波書店、1988、559。

註2) 齋藤月岑、東京大学史料編纂所編、2001、『大日本古記録 齋藤月岑日記』3、岩波書店、38-39。

【参考文献】

- 1) 福原敏男、2012、『江戸最盛期の神田祭絵巻一文政六年 御雇祭と附祭』、渡辺出版。
- 2) 福原敏男、2015、『江戸の祭礼屋台と山車絵巻』、渡辺出版。
- 3) 本田安次、1984、『東京都民俗芸能誌』上巻、錦正社。
- 4) 神田神社、2017、『江戸総鎮守神田明神論集』I、神田神社。
- 5) 神田明神史考刊行会、1992、『神田明神史考』、神田明神史考刊行会
- 6) 木下直之・福原敏男、2009、『鬼がゆく 江戸の華 神田祭』、平凡社。
- 7) 岸川雅範、2017、『江戸天下祭の研究 近世近代における神田祭の持続と変容』、岩田書院。

- 8) 大鳥居信史, 2018, 『神田明神のころ』, 春秋社.
- 9) 都市と祭礼研究会, 2007, 『天下祭読本』, 雄山閣.
- 10) 都市と祭礼研究会, 2011, 『江戸天下祭絵巻の世界—うたい おどり ばける』, 岩田書院.

※本稿は, 平成30年10月27日に開催された比較舞踊学会大会にて発表した『江戸の神社祭礼と芸能』の資料をもとに執筆したものである。